

CarroMag.

ちょっと
来てみる?



ワークショップ・レポート

デイ・イン・ザ・シアター

『キャロマグ』ってなに？

三軒茶屋のキャロットタワーにある世田谷パブリックシアターには、組織名と同じ「世田谷パブリックシアター」(600席)と「シアタートラム」(200席)という2つの劇場があり、年間を通じていろいろな演劇やダンスの作品を上演しています。ですが、その活動は劇場での上演活動に留まりません。3つある稽古場や、セミナールーム、世田谷区内の小中学校や児童館、高齢者施設などで、小学生からお年寄りの方まで、ありとあらゆる方たちが参加できるレクチャーや演劇ワークショップを行っています。キャロマグ(CarroMag.)は、そんな世田谷パブリックシアターの、通常目に留まることの少ないこうした活動を不定期で紹介する冊子です。ご案内をつとめるのは、うさぎのキャロちゃんです。もし、ちょっとでもご興味をもって頂けるような内容がありましたら、今度はぜひ参加しにいらしてくださいね。

Back Number バックナンバー



CarroMag.

Vol.14 | Dec.2018

CONTENTS

ワークショップ・レポート

デイ・イン・ザ・シアター

はじめに

《デイ・イン・ザ・シアター》が目指すこと

田幡裕亮(世田谷パブリックシアター学芸) 2

《デイ・イン・ザ・シアター》大解剖

じっとり梅雨の夜編 4

月曜から暑気払い編 6

エッセイ

すべての入口としての《デイ》

すずきこーた(進行役、世田谷パブリックシアター契約ファシリテーター、演劇デザインギルド) 8

インタビュー

《デイ》という新しい劇場の楽しみ方

川島英樹(せたおん/せたがや文化財団・音楽事業部) 10

《デイ》全日程アーカイブ1997-2018 16

CarroMag. Information

近日開催予定の主なイベント・ワークショップ 20

学芸スタッフから/おまけマンガ『たまにはこんな役 #14』

編集後記

《デイ・イン・ザ・シアター》が目指すこと

田幡裕亮 (世田谷パブリックシアター学芸)

どなたでも参加できる、 1日1回限りのワークショップ

《デイ・イン・ザ・シアター》(通称・デイ)とは、世田谷パブリックシアターが開館以来21年間、不定期に実施している1日1回限りの演劇ワークショップ(以下、WS)です。劇場に来て、知らなかった人と出会って、知り合っ

て、少し演劇をやってみます。とはいえ、いきなり「演劇をやりましょう」と言っても緊張するばかりですので、簡単な遊びのようなことをしながら、カラダとアタマを使って知り合ったり、その場に馴染んだりしながら、演劇することに少しずつ向かっていくのが常です。

《デイ》は基本的に1日1回限り、設定時間は2時間と短いために、ときには「うまくいかなかった」「もう少しやりたかった」「時間が足りない」といった感想をいただくことがあります。あまりよくない印象の感想とも受け取れますが、物足りなさ、未発展な部分を残すことは「また来たい」「またやりたい」につながると考えています。

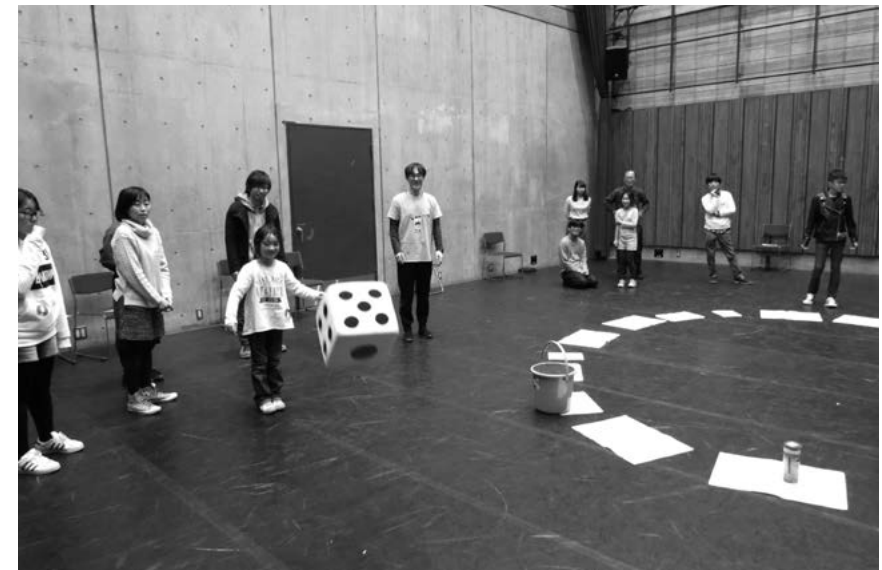
WSの内容は、花が咲いていたら花のことを、雷が鳴っていたら雷のことを、葉が散っていた

ら葉のことを、雪が降っていたら雪のことをといったように、季節のこと、時には時事問題を絡めることもあります。そんなふうに各回テーマを1つ決めた後、どんなことをすれば無理なくその場にいる全員が楽しめるのか、進行役とスタッフが相談しながら、その日の内容を考えます。ただし、それらはあくまで参加者を想定した実施「予定」の内容であり、進行役には、事前に決めた内容をただ参加者に提供するのではなく、当日、WSが始まってから稽古場に集まった参加者たちと何ができるのかを考えてほしいとお願いしています。

何度もいらして下さる方も多いので、WSでは、過去に一緒にになった人たちと再会することもあります。全員が同じメンバーだということとは、これまでありません。そのため、毎回違う組み合わせの人々との「初めての」演劇づくりになります。

参加対象は年齢、性別、住所、国籍、演劇経験の有無、障害の有無などに関わらず、あらゆる方に参加してもらえよう「どなたでも」としています。参加するための条件は何もありません。定員に達してさえいなければ、どなたでもご参加いただけます。

しかし「どなたでも」としていても、実際に



は曜日や時間帯によって、参加できる方の層が違ってきますから、少しでも幅広い層の方が来られるよう、様々な実施時間帯を設定しています。仕事終わりの平日の夜に実施する場合がありますが、土日の昼に実施する回もあれば、平日の午前中に実施する回もあります。日程や時間帯を変えることで、どんな方が参加して、どんな演劇が生まれるのか、楽しみにしています。

知らなかった人と出会って、 一緒に演劇をやってみる

どなたでも参加できる《デイ》は、家庭、仕事、学校など、ふだんの生活の背景が様々な人たちが参加します。参加理由も「劇場での公演をきっかけに世田谷パブリックシアターに興味をもったから」「稽古場に入ってみたかったから」「子どもの頃、WSに参加したことがあるから」「子どもと一緒に参加できるから」「子どもが手元を離れて時間ができたから」「定年退職して演劇を始めたいと思ったから」など、様々です。そのとき、私たちが大切にしているのは、名前や年齢、仕事や所属を知らない参加

者同士が劇場という場で出会い、限られた時間の中で、一緒に何かをつくるということです。そのプロセスにおいては、お互いの違いを理解し、受け入れることが起こります。

そうした協働作業が、社会を変えていく小さな一歩になると私たちは信じています。

さて、初めての《デイ》は、世田谷パブリックシアターの開館プログラム《ライブ・イン・ザ・シアター》が上演終了した後の1997年5月27日でしたが、翌1998年からは世田谷パブリックシアターの「お誕生日スペシャルプログラム」として毎年、劇場が開館した4月5日に《デイ》を実施しています。

毎年、劇場が生まれた日に《デイ》をすることで、新年の誓いのように「劇場がどのような場でありたいか」を確認しているようにも感じています。私たちは、劇場が全ての人にとって身近な場所であることを願っています。

特別な用意はありませんが、動きやすいカラダとココロで劇場に遊びに来てもらえれば、誰でも大歓迎です。進行役・スタッフ一同、準備してお待ちしています。

じっとり梅雨の夜編

進行役：すずきこーた 参加者：17人 日時：2017年6月16日（金）19：30～21：30

雨の思い出をシェアしてそこから劇をつくった回。思い出をシェアするにあたって、話をするきっかけに絵を描いてもらいました。絵を描くことに苦手意識のある人でも上手下手を気にせず描けるよう、絵を描くのに使いそうにない素材で描くことを試しました。めんつゆとシソ梅酢で絵を描いてみたところ、稽古場内はめんつゆの濃厚な香りと、シソ梅酢のほんのり甘酸っぱい香りに満たされました。〔田幡〕

19:30 ごあいさつ、劇場の説明、スタッフ紹介

19:35 稽古場の中を歩く

①全員バラバラに色々な方向に歩く。
②すれ違う人と「こんばんは」とあいさつする。
③すれ違う人と「よろしく」とハイタッチする。
④すれ違う人とお互いの膝を合わせて「よろしく」とあいさつする（だいたいここで、参加者の皆さんは緊張が解けて来てケラケラ笑いだします）。
⑤進行役がゴーと言ったら歩く、ストップと言ったら止まる。
⑥ルールを逆にして、ゴーと言ったら止まる、ストップと言ったら歩く。
⑦ゴー、ストップは逆だったのを元に戻して、今度は「ハイ」といった後の指示にだけ従う。ハイ、ゴーで歩く。ゴーでは歩かない。
⑧ゴー、ストップに加えて、〇〇人組、と言われたらその人数でグループを組む。これも「ハイ」の後の指示にだけ従う。

19:45 “give me a shape”, “give me a space”

＊梅雨にちなんだもの、カサ、アジサイなどを身体で表現します。

参加する
メンバーと出会う

シェイプ・スペース

20:00 思い出をシェアする

参加者それぞれが、雨の思い出を絵の具の代わりに「めんつゆ（梅雨とかけて）」「シソ梅酢（入梅とかけて）」を使って描き、描けた絵を1人ずつ紹介する。

20:20 タブロー（フランス語で「絵画」）づくり

4グループに分かれて、メンバーの絵の中から1枚（A）を決め、その絵に描かれている人や物にメンバーを見立てて配置し、ストップモーションで表現する（A'）。1枚目の絵のかたがちが決められたら、もう1枚、別の絵（B）を選び決めて、同じようにストップモーションで表現する（B'）。

20:40 タブローを発展させた劇づくり

これまで使っていない絵（C）のストーリーを、1枚目の絵と2枚目の絵の間に入れた劇をつくる。

20:50 劇の発表、意見交換

20:55 つくりなおし

他のグループからもらった意見を参考にして、劇をつくりなおす。

つくりなおした劇を発表

21:25 ふりかえり、今日の感想を聞く

21:30 おしまい

演劇づくりの
下地となる
共通体験

シェアした思い出を
もとに一瞬の場面（ス
トップモーション）から
徐々に時間の流れの
ある演劇をつくる

劇のつくりなおし

ふりかえり

月曜から暑氣払い 編

進行役：柏木陽、大道朋奈 参加者：25人 日時：2018年8月6日（月）19:00～21:00

真夏の夜は、月曜日でも疲れているだろうということで、「暑氣払い編」と銘打ちました。5・7・5ではなく、各節2文字、字余りで詠んでみるとテンポがずれて意外と味わい深かったりするので、7・9・7という定型で川柳を詠み、劇をつくることにしていました。しかし、連想ゲームで夏のイメージがたくさん出たため、試しに5・7・5で詠んでもらったらどれも名作揃い、とても盛り上がったので、その5・7・5をもとに劇をつくることにしました。私の詠んだ「2階から ギリギリ見える 二尺玉」は劇になりませんでした（笑）。^{〔田幡〕}

19:00	ごあいさつ、劇場の説明、スタッフ紹介
19:05	ストレッチ
19:10	もしもしかめよ 全員で円になって「♪もしもしかめよ～」と歌を歌いながら、リズムに合わせて左右隣の人の肩を交互に叩き、最後の1拍で手拍子する。 8 :もしもしかめよかめさんよ ⇒ 8 :せかいのうちでおまえほど ⇒ 4 :あゆみののろい ⇒ 4 :ものはない ⇒ 2 :どうして ⇒ 2 :そんなに ⇒ 1 :のろ ⇒ 1 :いの ⇒ 1 :か（手拍子）
19:20	しりとり ＊日本語を話すのが得意ではない方がいたので、途中でじゃんけん握手に変更。
19:25	じゃんけん握手 2人組で向かい合って立ち、一度握手し、握った手を開き少しだけ離す。もう一方の手でじゃんけんをして、勝ったほうは相手の手を掴む、負けたほうは捕まれないように手を離す。

参加する
メンバーと出会う

参加者同士が
知り合う

演劇づくりの
下地となる
共通体験

思い浮かんだ
夏のイメージから
演劇をつくる

ふりかえり

19:30	押し相撲 2人組で向かい合って立ち、手のひらを相手に向ける。手のひらだけを触って、相手の足を一歩でも動かしたら勝ち、動いたら負け。手のひら以外に触った場合も負け。
19:35	おもちつき 2人組で、2人とも一定のテンポで手拍子する。もちをつくほう、つかれるほうを決めて、もちをつくほうは自分の手のひらの次に、相手の手のひらを叩くのを挟む。
19:40	連想ゲーム ①2人組で、相手が言ったことから思いつく言葉を交互にどんどん言う。 ②3人組のグループに分かれ、「夏」というお題からイメージすることを紙にたくさん書いて、いくつ書けたか発表する。たくさん書けたグループの勝ち。 ③同じ3人組で「ギリギリ夏」という言葉から考えつくことを書き出し、その中から一番「ギリギリ夏」を感じられるものを選ぶ。さらに各グループから挙がった中から最も「ギリギリ夏」な言葉を決める。 ④グループで「甘酸っぱい夏」からイメージすることをたくさん出し、その中で一番を決めたら、グループでそれぞれ発表し、その中からさらに今日一番の「甘酸っぱい夏」を決める。
20:00	夏の5・7・5（川柳）を書く・発表する もともとのプランでは、この後、7・9・7で書いてみる予定だったが、5・7・5で面白いものができたので割愛することに。
20:15	夏の5・7・5を元に グループごとに演劇をつくる できた演劇を発表
20:50	ふりかえり、今日の感想を聞く
21:00	おしまい

すべての入口としての《デイ》

すずきこーた（進行役／世田谷パブリックシアター契約ファシリテーター、演劇デザインギルド）

世田谷パブリックシアターの開館直後より、同シアターの様々なワークショップを進行しているすずきこーたさん。《デイ・イン・ザ・シアター》には、1999年より進行役として参加。数多くの回を進行し、劇場と共に《デイ》をつくりあげてきたこーたさんに、エッセイを書いていただきました。

その場に集まった人で 演劇をつくる

「劇場への入口」「演劇への入口」「劇場で行われるワークショップへの入口」であることを目指した《デイ・イン・ザ・シアター（以下、デイ）》は、世田谷パブリックシアターの初代監督・佐藤信さんが「劇場は、演劇人だけの特別な場所ではなく、色々な人が集う場所である」という想いを込めた「劇場は広場である」（この言葉は、世田谷パブリックシアターの入り口に書いてあります）という一文を具現化したプログラムです。

世の中で行われている演劇のワークショップ（以下、WS）には本当に多くの種類がありますが、世田谷パブリックシアターでは集団創作（協働作業）を行うことを基本としていますので、《デイ》は「集団創作の入口」でもあるわけです。そして、私たち進行役は、集団創作の場づくりを行っています。

集団創作をする場合、私たちが大切にしているのは、集った人たちが知り合い、互いを尊重し合い、それぞれの想いを大切にしながら演劇をつくっていくことです。とりわけ《デイ》では、初めて出会う人同士と一緒に活動することが多いので、全く違う背景をもつ人たち一人ひ

とりの記憶や体験を紹介し合うことが少なくありません。そのため、演劇創作の過程で経験の差が出たり、意見が食い違うこともあります。そのときに「あんた変だよ！」と言うのではなく「自分とは異なるあの人の考えを、どうやって一つの演劇に入れられるだろう」と考えることが大切です。互いを受け入れながら、違う意見（ときには正反対の意見）を並べながら、より良い演劇をつくることを目指すのです。

それは、少し話が大きくなってしましますが、社会にとっても必要なことだと私は思います。多数決だけではない社会、互いを尊重し合える社会のほうが生きやすいと思いますし、演劇やWSを通じて、そういう社会に向かおうとする感覚が広まっていくといいなぁと思っています。大げさだと思われるかもしれませんが《デイ》は「平和への入口」であるとも、私は真剣に思っています。

大震災直後の《デイ》

20年続いてきた《デイ》の中で忘れられない回があります。それは東日本大震災の後、最初に開催するWSになった2011年3月22日の回の《デイ》です。当時は地震の被害や津波の影響、原発のことなど、明らかにしていな

いことも多く、私たちの生活は混乱していました。また自粛ムードも高まっていました。そんな時の《デイ》です。

私は進行役として参加者に向かって何ができるかを考えながら、自分自身とも向き合い、何をしたいのかを考えていました。いや、考えたというよりも、心に生まれた欲求を、それを劇場スタッフや他の進行役メンバーにぶつけてみました。それは「大きな声を出したい！」でした。

良いとか悪いとかではなく、意味があるとかないかなどではなく、WSに参加している人たち全員が、身体の中にあるモヤモヤを、心のモヤモヤを、一瞬かもしれないけれど、自分だけではなく自分以外の人も、吐き出す必要があると思ったのです。そして、実際に大きな声を出すだけの時間を取りました。その後は少し身体を動かしたり、劇もつくりました。少し笑ったりする場面もありました。

最後に私は「被災された方のことを考えると、WSを開催したことの是非も考えなくてはならないと思っていました。でも、今、私に必要だったのは誰かと会うこと、誰かと話すこと、身体を動かすこと、声を出すことだったんだと、改めて思いました」というようなことを言った記憶があります。参加者の方々も「色々な思いはあるけど、参加して良かった」と仰って下さいました。「デイをやって良かったなぁ」という思い、「気持ちが救われたなぁ」という思いが、その回は非常に大きかったのを覚えています。そして被害の大小はあれど、ストレスが溜まっていたことを自覚した私もまた、被災者の一人であることに気づいたのです。同じ被災者であるからこそ、東北の方たちのことや原発から避難を余儀なくされた方々に対して、決して他人事ではなく、自分のこととして何ができるかを考えるきっかけにもなったと思いますし、誰かと一緒に時を過ごしたからこそ、そのことに気付いたのではないかと、今はふりかえります。

集団創作、そして平和への 入り口にある演劇

毎回《デイ》は、参加者の人数やその他の要素（年齢、性別、身体具合などなど）を考慮してプランを立てています。90歳のおばあちゃんがいっちゃうから鬼ごっこは止めようとか、夏だからスイカ割りをしようとか、4歳の子がいるから字を書くのは止めようとか、劇場の誕生日だからお祝いをしようとか、その時にやれる最高のことを考えながらプランニングしています。でも時には「私（進行役）が大きい声を出したいから」という理由でプランニングしてもいいと思っています。そうすることが進行役も参加者と一緒に、対等に会うことにもなりますし、そうすることで良いWSになっていくように感じるからです。

私は数多くの《デイ》を進行することで多くのことを体験し、考えてきました。演劇WSで何を目的とするか、集団創作（協働作業）をすること、プランニングやアクティビティの種類、進行役としてのあり方といったことを考え、発見し、学んできました。これは私一人でできたことではなく、これまで《デイ》に参加して下さった皆さんに気づかせてもらったことだと思っています。そして数多くの蓄積があったからこそ、震災直後の《デイ》を行うことができたのだと思います。《デイ》を進行することで、演劇に対する考えも広がりました。私はただWSを進行するのではなく、私の考える演劇を多くの人に伝える術も《デイ》で学びました。長期のWSや学校などでのWSなどのベースには《デイ》があり、応用しています。これからも数多くのWSを企画・進行したいと思います。その度に私は《デイ》に立ち返るでしょう。全ての人が住みやすい社会、平和な社会のために演劇が活用されていくこと、その入口に《デイ》があり続け、劇場は私も含めて色々な人が集う広場であり続けてほしいと思います。

《デイ》という 新しい劇場の楽しみ方

川島英樹 (せたおん／せたがや文化財団・音楽事業部)

聞き手＝恵志美奈子・田幡裕亮 (世田谷パブリックシアター学芸)

この劇場にとって何が必要か ― 世田谷パブリックシアター開館前から、その間いの中で数々のワークショップを企画、施行してきた元・劇場部学芸スタッフの川島英樹さんに、《デイ》が生まれた経緯や当時のワークショップの様子などを、現・学芸スタッフが聞きました。

WSをやるために つくった劇場

恵志 《デイ・イン・ザ・シアター (以下、デイ)》は、この劇場が開館した当初からやっている企画ですよ。川島 そうですね。1997年4月5日に劇場が開館して、最初の企画がフリーステージ〔※1〕で、翌月5月2日から25日までシアタートラムの柿落とし公演《ライフ・イン・ザ・シアター》があり、27日に《デイ》の1回目をやりました。ワークショップ (以下、WS) としては劇場開館後、最初の企画ですね。

ただ、演劇WS自体は、劇場ができるまえの89年からプレイベント〔※2〕でやっていたんです。プレイベントでは、公演をほとんどやらないで、将来、劇場ができたときにやってみたらどうだろうかというWSを試していたんです。それらの試みがわりとうまくいったので、開館したあとも続けていきたいと思います。恵志 劇場をつくるためのプレイベントで、WSをやることにしたのは

どうしてですか？

川島 それは世田谷パブリックシアターが「WSをやるためにつくった劇場」だったからです。ふつう「劇場」と言ったらイメージされるのは、「プロが舞台上がって、一般の人たちが客席でその劇を楽しむ」みたいな場だと思うんですけど、世田谷パブリックシアターはそれだけではなく、市民、一般の人たちが「自分たちも劇を体験する」、もっと言うと「客席から舞台を見る以外のかたちで演劇を体験する」ことをモットーにした劇場づくりを最初から計画していたんです。

恵志 その頃、そこで言う「WS」は、どういう体験をするものとしてそう呼んでいたんですか？

川島 「自分たちも体を使って劇を体験する」とか、「劇場でみんなと出会う」とか、「演劇の手法を使ってモノを考える」とか、そういうようなことをひっくるめた広い意味でWSと呼んでいた。恵志 そう。恵志 そういう体験ができるWSを

やるための劇場にしたい、という考えが出たのは、雑居まつり〔※3〕などで演劇がまちづくりや人づくり、コミュニティづくりに有効に活用されている現場が世田谷区にはあって (羽根木公園で開催されていた)、そうした演劇のあり方を三軒茶屋の再開発に活かそうとしたからだ。私は理解しているんですけど、正しいですか？

川島 インターネットがない時代に、情報センターの機能をもつ複合施設を三軒茶屋駅の周辺につくりましょうという漠然としたアイデアが出て、そのアイデア段階のときに、当時、雑居まつりなどに関わっていた黒テントから、佐藤信さんを基本計画の策定メンバーに呼んできたということ自体、演劇がもつ可能性を劇場で試そう、という気持ちがあったとは言えるでしょうね。

《デイ》の布石となった プレイベントでの演劇WS

恵志 プレイベント (1989年～1997年) の時は、どんなWSをしたんで

すか？

川島 「演劇ワークショップ」を、「世田谷演劇工作房」と日本語に変換して6回開催しました。一般を対象に結婚、舞台技術、福祉をテーマにした企画を各1回。小学生を対象にした企画を1回。高校生を対象にした企画を2回です。

当時、劇場と生活工房のスタッフが同じ部で働いていて、関係者一同で実施していたんですよ。「結婚」をテーマにしたWSでは、新婚の人や結婚式場へ取材に行ったりしましたね。ちなみに、「本づくりワークショップ」というものもやっていて、前監督 (佐藤信さん) が、「これも演劇ワークショップだ！」って強く主張していたのを覚えています。

田幡 各企画の実施回数はどれくらいですか？

川島 企画によって微妙に違いますが、だいたい7～8回程度 (週末ごとに1ヶ月から1ヶ月半) くらいでしたね。

田幡 時間はやはり2時間で？

川島 もっと長い時間でした。開始時間と終了時間を決めたら、それ自体がムリ！って進行役に言われた。進行役はプレイベントの時は黒テントの人たちがやることが多かったんですけど。言われたのは、WSというのはその場に人が集まって、そこから何か生まれるわけで、終わりなんてものはやってみなきゃ



劇場ができるまえ、プレイベントでのWSの様子。

わからない、最初から時間を決めるのはナンセンスだと。実際、最初の頃は随分、時間もオーバーしました。恵志 カール・ロジャースの非構成的グループエンカウンターから、構成的グループエンカウンターが出てくるみたいな流れと被りますね。別に《デイ》が構成的だといってるわけじゃないけど、余裕をもって結果を求めずにやっていた頃から順々に体系だてられていく、という意味において。

プレイベントでの、そうした終わりを設定しないようなWSは、どうやって参加者を募集したんですか？川島 チラシとかですね。最初のWSは、50人くらいは集まったと思います。世田谷文化生活情報セン

ターが入っているキャロットタワーって、いまだに世田谷区で一番高い建物ですけど、区内のいい場所にこんな大きな建物をつくるわけなので、そこで何をやらおうとしているのかが注目されていたんです。必ずしも再開発に賛成していない人たちも様子を見に来ていましたね。

その日、2時間だけの ワークショップが 生まれたワケ

恵志 今までお話をしてもらったように、劇場が開館する前のプレイベントで演劇WSを試されて、いざ開館してから《デイ》を始めたわけですよ。そのとき、《デイ》のよう



シアタートラムで行った《デイ》の様子 (左:2008年、右:2013年)。





「劇場ツアー」の様子

なフォーマット、つまり「1回限り、2時間」にしたのはなぜですか？

川島 この劇場は当初、市民、一般の人たちが「劇を体験する」、さらに言えば「客席から舞台を見る以外のかたちで演劇を体験する」ことをモットーにしてつくられたって言いしましたが、つまりそれは「この劇場が、このまちで暮らす一人ひとりのための場所でもあるんだよ」というメッセージをもっているからだったわけです。そのメッセージを発するために、演劇WSが有効だと考えたわけですが、20年前はWSっていう言葉自体、ほとんど知られていなかったんですよ。

思い出すのは、プレイベントで区内の施設を借りる時、申込書の使用目的に「WS」って書くと、「なんですか？」ってまず聞かれて、なかなか理解してもらえない。そのうちに「WS」って書くと、「あ、あのよく分からないやつですね」ってなって話が通じはじめるっていう……そのくらい誰もよく分かってなかった。

なので、このわけの分からないものをなるべく多くの人に経験してもらうためには、何回も来て下さいって言うよりも、短時間で1日限りって言うほうがハードルが低いだろう

と。《デイ》のフォーマットが生まれたのは、そういう発想からです。
田幡 《デイ》の進行役はどういう人がやったのですか？

川島 《デイ》はプレイベントなどの事業を通じて育った自前の人材でやった初めての企画です。富永圭一さんがいい例ですけど、彼はプレイベント1回目のときは参加者で、1997年になるまでの間には進行チームの中に入りました。

《デイ》独自の体験とは？

田幡 《デイ》の最初の頃は、どのようなプログラムだったのですか？

川島 開館当初は、劇場のスケジュールが現在のように詰まっておらず、トラムを含め、複数の場所を使えることが多かったこともあって、「劇場ツアー」というとバックステージ見学っていう感じですけど、「劇場ってこんなところですよ」というのを見てほしかったのです。ひとしきりコミュニケーション・ゲームをやったあとで、事務所みたいな場所も含めて建物としての劇場体験してもらって、その感想みたいなものから簡単な演劇をつくって発表してもらったりしました。だんだん劇場の

スケジュールが混んできて、今のように稽古場で《デイ》が終始することが増えましたね。

田幡 当初の《デイ》は、作品をつくって、作り直すことに時間をかけるよりは、劇場を知ってもらうことのほうに時間をかけたんですね。最初の頃もやはり2時間でしたか？

川島 休日などは3時間にしていたね。
恵志 なるべく誰でも参加しやすいように、その日限りのWSとして企画した《デイ》での目標なり着地点というのは、ある程度、川島さんの中で想定していました？

川島 自分たち劇場スタッフは、プレイベントでの体験があったので、WSを通して独特の体験が得られることを確信していたんですけど、それを明確な言葉にするのは、僕は未だにできない。その経験は、少なくとも演劇WSというもので生み出しやすいものだって思っているんだけど、それは説明できないから、やってもらったほうが早いだろうと。

恵志 川島さんが確信したその体験というのは、言葉にするのは難しいと思うんですけど、あえて言うとするとうどんな体験なのでしょう。

川島 うーん。どうだろうな……みんなが一樣じゃないところが面白い



開館日で実施した《デイ》で、劇場の誕生日をお祝いするケーキ。



テーマ「カマキリ」でシェイプ！

って感じかな？ 反応、発見、持って帰るものがみんな微妙に違うというか、それぞれであるというか。

恵志 その「反応、発見、持って帰るものがみんな微妙に違う」っていうのは、WSが終わって何を感じたかをみんなで共有する「ふりかえり」の時間を持つから、あれ、他の人は自分とは違う反応なんだって気が付くわけですね。だから、ふりかえりするっていうのは大事ですね。
川島 そうですね。それは昔からやってきましたね。その日の体験を各自が自分の中でふりかえって、みんなで共有することの面白さ。僕は黒テントのWSから、それを学びました。

恵志 「ふりかえり」に時間をかけるのは、世田谷パブリックシアターの特徴でもありますね。

話を戻すと、川島さんが面白いと思っていたポイントは、人は一人ずつ違うことに気づくっていうことではないですか？

川島 そうですね。一人ずつみんな違うことに加え、その時間、一緒に何かのことをできるってことも面白いと思っています。場を共有して、

共通体験をしたっていうね。

田幡 体験は同じで、でも考えることは違って、にもかかわらず一緒にいられるよねっていうことですよ。

恵志 社会における多様性を感じ、かつその多様性と共生する体験をするってことだとも言えますね。

川島 そんな言葉でまとまるようなツマンナイもんじゃないよ（笑）。

もしかしたら演劇かも？ 「シェイプ」と 「スペース」の面白さ

田幡 現在の《デイ》のように、シアターゲームをやって、シェイプをやって、スペースをやって、みんなでお題に基づいてなんかつくって、発表して、ふりかえりをして終わりっていう構成になったのは、いつ頃からですか？

川島 敢えてそう聞かれれば、《デイ》の演劇体験部分は最初からそういう構成だったところはありますね。そこに建物としての劇場体験部分も含まれていたというだけで。

恵志 実は私、シェイプとスペース

【*4】の面白さが分かるまでに、つまりその演劇性を理解するまでには、けっこう時間がかかったんです。《デイ》で「シェイプ」と「スペース」をやるって思ったのはなぜですか？

川島 早並びでもじゃんけんゲーム【*5】でもなんでもいいんですけど、多くの一般市民にとってそれをやるだけでは「演劇をやったな」という感じになりにくいと思うんですよ。短い時間で「これ、もしかしたら演劇かも？」って思ってもらえる手段として、「シェイプ」と「スペース」はかなり有効だと思ったんでしょうね。

恵志 つまり、川島さんは最初から「シェイプ」と「スペース」が面白かったんですね。どこが演劇として面白いと感じていたんですか？

川島 どこがって言われても困るけど……ばかばかしいっていうか、ふつうやらないですよ？「これ傘だよ！」なんて。でもそう言われて、そう見てみれば、そういう気もしないでもないかな、みたいな。それってちょっと面白いじゃないですか。

恵志 話を聞いてて、今、発見があったのだけど、いわゆる演劇って「見立てる」わけですね。劇場の舞台はふつう虚構の空間で、観客はその舞台上に、これはあの場所だとか、見えないもの、実際にはないものを見て「見立て」ていく。確かに「シェイプ」にもそういう見立ての構造がある。

川島 見るほうが頑張らないと、そう見えないんですね。つまり見るほうも大事なんですね。

田幡 見るのが大事になる仕組みがシェイプとスペースにはある、ということですね。

川島 それに「コップをつくって!!」って言われて、やるほうも一人でそのかたちをつくって、その姿をじっと見られているのは嫌だけど、シェイプではみんな一斉にやるでしょう。だから恥ずかしさがあまりない。しばらくたって一人に注目する場合も「この人、凄くうまいから見てみましょう」ってなるので、恥ずかしいと思っていても、うまいって言われてるからまあいいか、みたい

な気分になりますよね。

恵志 つまり、見るほうにとっては「見立てる」という演劇の要素があり、やるほうにとってばかばかしい感じでコップだとかつくって褒められているうちに、人前で体を使って何かやる、それ自体が演劇だって言えるけど、そうしたことへの抵抗がなくなっていく。そういう仕掛けが、特にシェイプにはありますね。

でもちょっと思うのは、《デイ》には演劇の要素が全てあると思うけど、演劇WSって「演劇」から分断されやすい傾向にあるから、「演劇」に対していろんな捉え方や考え方をもたないと、《デイ》的な演劇は《デイ》という枠組みに囲われてしまう。演劇とは違うただのフィジカルアクティビティみたい。でも、いろんな意味で《デイ》や演劇WSは演劇と地続きだし、そのことを分かりやすく伝えていかないといいですね。

川島 それはぜひやって下さい。

新しい劇場の楽しみ方へ

田幡 印象深い回ってありますか？90歳のおばさんや臨月の人が来た回とかもあったらしいですね。

川島 日本語がほとんど喋れない外国人も来ましたね。《デイ》は不定期でも断続的にやっているわけで、ずっと来ていた人がある日ぶつり来なくなって、しばらくたって忘れた頃にまた来る、なんてことがけっこうあるんです。10年越しに来たりね。そうすると面白いですね。**恵志** その面白さって、それぞれ違う時間を生きている人と人が《デイ》の場で集ったり、出会ったり、かつ人が戻ってくる場になっているということの面白さなのかしら。

川島 そうだね。あと、《デイ》をやった後ってお喋りがしやすいじゃないですか。ふつう出会って2時間くらいだと、あんな感じにはお喋りできないですね。

恵志 WSの体験を通じて人が交流する、そこに川島さんは面白さを感じとっていたということですね。

私は演劇っていうのは、ただ消費するだけではない、いろんな人が自分の考えや意見を交わすメディアだと思っているので、《デイ》というプログラムを通じて、その場での交流が生まれる場が生成されるのが面白い。ところで、直球の質問をしてしまいますが、川島さんにとって、《デイ》ってなんですか？

川島 うーん、それはあなたにとって演劇とはなんですか、と聞かれるのとそんなに変わらないわけよね。かつて劇場部にいた時に聞かれると、仕事って答えただけ(笑)。まあ、うまくは答えられないですね。「この劇場にとって何がいいか」っていう出発点がなければ考えなかっただろうものとは言えますけど。

劇場ができたときに最初に実施したWSが、そのまま続いているというのは、すごく嬉しいです。冗談みたいな話だけど、《デイ》を始めた時、最初はどこまで続くか皆目、分からなかったから、柿落とし公演の《ライフ・イン・ザ・シアター》の公演数(28回)まではやろうと。そのうち回数は達成したから、じゃあそのお客の人数を目指そうって。いま凌いだのか分らないですけど。**恵志** 200人(トラムの収容人数)掛ける28回、ざっと6,000人弱か……(その後、正式に数えて7,478人と判明)。**田幡** 超えてるかなあ。1回の《デイ》で定員の20人が来ているわけでもないから。回数は圧倒的に凌いでいるけど。



スイカ割りの演劇をつくったあとに、「本物」のスイカでスイカ割り。

恵志 じゃあ、それまでは目指そう(笑)。

田幡 《デイ》は開館からずっと、つまり丸21年続いていて、僕は川島さんから引き継ぐ形で2011年度から、7年ほど担当しています。この7年でも変化というか、長年やってきた成果を感じています。それは、参加者が身体で表現することに対する抵抗が減ってきているということです。必ずと言っていいほどやって「シェイプ」「スペース」をやらなくてもスムーズに演劇づくりをすることができるようになってきたように思います。「シェイプ」「スペース」をやらないプログラムを実施することも増えてきました。

恵志 それは大きな変化よね。

田幡 そう思っています。川島さんは僕の倍の期間、異動してからも含

めれば3倍、見てきたわけですが、長く続けたことによって何を達成しているとか、どんな成果ができていると感じますか。

川島 演劇の公演って、作家とか役者とか、固有名詞で来ることが多いですけど、《デイ》は有名な演出家ややってるからとか、人気のある役者さんと一緒にできるからというものではなくて、劇場でなんかやろうかなーみたいな感じで来てくれるものだと思うんですよ。そういう意味で、劇の楽しみ方ならびに劇場の楽しみ方を、ささやかながら提示しているとは言えるんじゃないでしょうか。まあ、簡単に言うと、劇場の、演劇のファンづくり、またそれを超えた理解者や実践者をつくるきっかけになっているのではないかと思います。(世田谷パブリックシアターにて)



年末に行った《デイ》。テーマ「大掃除」で演劇をつくる。

【*1】**フリーステージ** 劇場が世田谷区民と共につくりあげるステージ。

【*2】**プレイベント** 1970年代から始まった三軒茶屋駅周辺の再開発事業にあたり計画された文化・生活情報センター【世田谷パブリックシアターが入る現・世田谷文化生活情報センター】の設計や事業計画のために行われた予備活動のこと。1989年～1997年にかけて実施。これは「基本計画」(88年)を定めたあと、「事業計画大綱」策定(93年)を挟み、「開館」(97年)までにあたる。のちに劇場の初代劇場監督になる佐藤信や彼の劇団の黒テントの人たちなども関わった。

【*3】**雑居まつり** 世田谷区の羽根木公園を会場に行われる市民活動のお祭り。1976年に第1回が始まり、現在まで続く。どんな人も分け隔てなく参加できるという意味から雑居という名前が付けられ、「地域の問題

は地域住民の手で」というスローガンを掲げている。

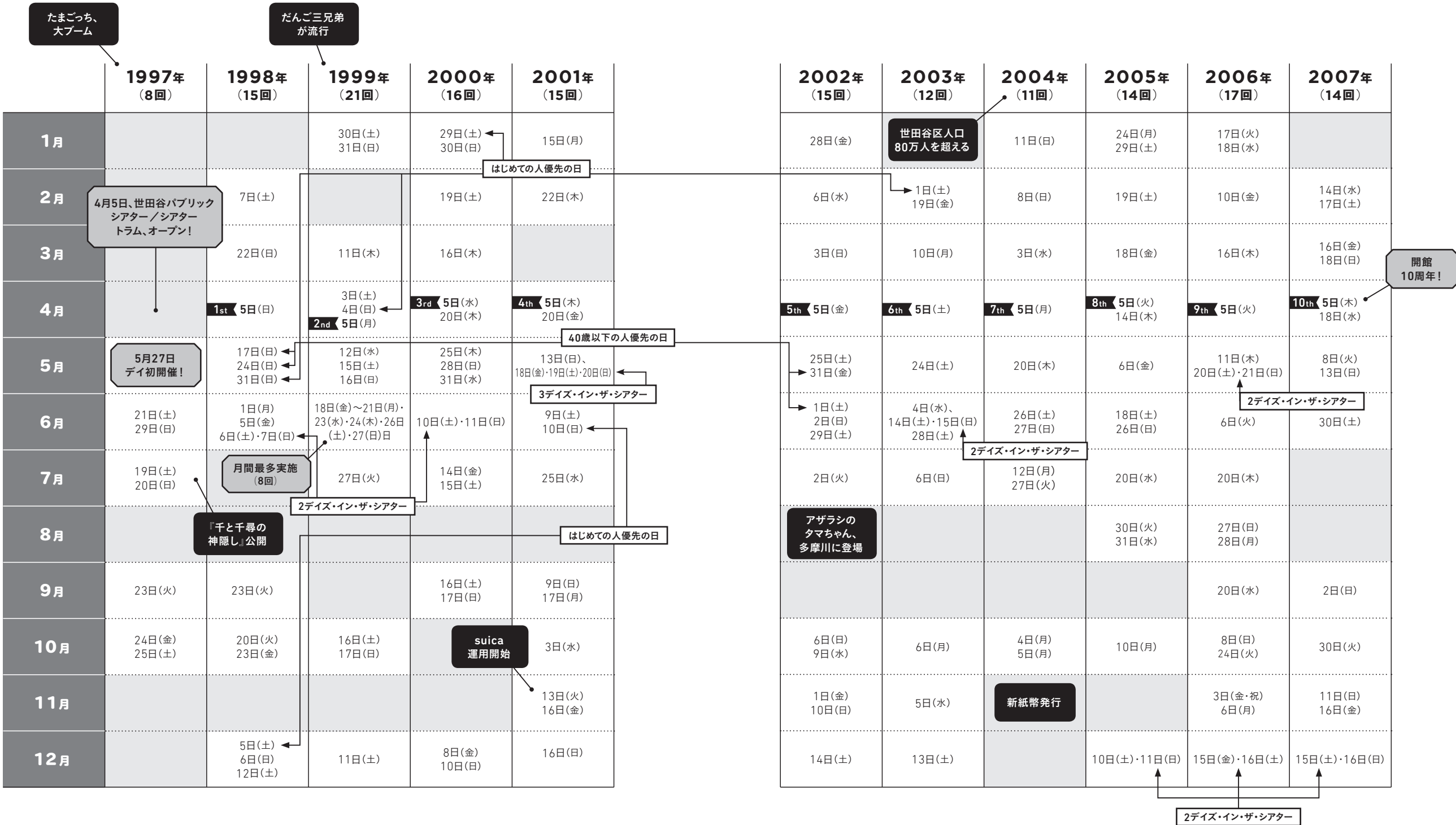
【*4】**シェイプ、スペース** そこにいる人の身体でモノや空間を表現していくシアターゲーム。シェイプでは、1人で1つのモノのかたちになることから、複数人で1つのモノをつくることを行う。スペースはそうしたシェイプの体験後に、それらのモノを空間に配置して場所を表現する。例:シェイプ=バット、ボール、椅子(1人、2人、etc)/スペース=コンビニ、神社、海など。

【*5】**早並び、じゃんけんゲーム** シアターゲームの一つ。「早並び」は、手の暖かい順、背の順、足が大きい順などのお題を出し、チーム対抗でどちらが早く並べるかを競う。「じゃんけんゲーム」は、2人1組になって体の一部を動かしたり、全身を使ったりしてじゃんけんをする。

《デイ》全日程アーカイブ 1997-2007

開館してから最初の10年。1回2時間が基本ですが、休日に長時間で実施したり、複数日で実施してみたり、「はじめての人優先」の回を設けたりと、より幅広い層の方が来やすくなるように工夫を試みました。例年8月は「夏休みの子どもワークショップ」があるため少なめですが、それでも年間で平均すると月1回以上は実施しています。この頃、ワークショップという言葉は一般にはまだ馴染みがな

く、さらに演劇ワークショップとなると、想像もつかなかったことでしょう。20年間の中で月間最多実施回数は1999年の6月、10日間で8回!! 皆勤実施月は2006年。こうして回を重ねるごとに、ワークショップという言葉が少しずつ普及していったように思います。劇場の誕生日の4月5日には毎年、欠かさず実施しています。



《デイ》全日程アーカイブ 2008-2018

開館当初の10年と比べると、劇場の稽古場がおさにくくなり、また《デイ》以外の演劇ワークショップの企画もたくさん増えたことで、実施回数は減っています。劇場の誕生日4月5日の実施は変わらず続けていて毎年、楽しみにしている方もいらっしゃるようです。中でもいちばん楽しみにしているのは劇場スタッフ・進行役かもしれませんが(笑)。参加する方の年齢層は幅広いです。傾向としては、

	2008年 (13回)	2009年 (10回)	2009年 (8回)	2010年 (10回)	2011年 (6回)
1月					
2月	10日(日)	11日(水・祝) 16日(月)		東日本大震災	17日(金)
3月	8日(土) 19日(水)	3日(火)	3日(水)	22日(火)	12日(月)
4月	11th 5日(土)	12th 5日(日)	13th 5日(月)	14th 5日(火)	15th 5日(木)
5月	24日(土) 25日(日)	15日(金) 24日(日)	28日(金)	15日(日)	東京で金環 日食を観測
6月	2日(月)	全国各地で オタマジャクシ 騒動が起こる	16日(水) 17日・18日(金)	27日(月)	
7月	18日(金)	8日(水)	7日(水)	30日(土)	20日(金)
8月	iphone3G 発売			23日(火)	
9月	25日(木) 28日(日) 30日(火)	25日(金)		14日(水)	
10月			28日(木)	21日(金) 22日(土)	5日(金)
11月	3日(月・祝)	20日(金)		5日(土)	
12月	10日(水)	23日(水・祝)	25日(土)		7日(金)

2000年代後半は20〜30代女性の割合が比較的多かったのですが、最近は減ってきているように感じます。2010年代になってからは、子どもの参加者が増え、幅広い世代が交流できるワークショップになっています。また、2011年、東日本大震災直後に《デイ》を実施しました。この日の《デイ》については、すずきこーたさんのエッセイ(p8)に詳しく書かれています。

2013年 (3回)	2014年 (4回)	2015年 (4回)	2016年 (7回)	2017年 (6回)	2018年 (6回)
		18歳から公職選挙 の投票が可能に			6日(土)・8日(月・祝)
	関東地方で 記録的豪雪			17日(金)	2デイズ・イン・ザ・シアター
			11日(金)		開館 20周年!
16th 5日(金)	17th 5日(土)	18th 5日(日)	19th 5日(火)	20th 5日(水)	21st 5日(木)
		15日(金)			
15日(土)	8日(日)		25日(土)	16日(金)	23日(土)
	23日(水)	17日(金)	19日(火)	17日(月)	
24日(土)・25日(日)		31日(月)	19日(金)	31日(木)	6日(月)
2デイズ・イン・ザ・シアター	13日(土)			28日(木)	15日(土)
	ご当地ナンバー 「世田谷」 導入開始		28日(月)		
			27日(火)		21日(金)



近日開催予定の主なイベント・ワークショップ

デイ・イン・ザ・シアター

1日限りの「演劇&劇場」体験ワークショップ

参加者募集中!!

普段はなかなか入れない、
劇場の稽古場での1日限りの演劇体験ワークショップ。
演劇にちょっと触れてみたい!という方や、
稽古場に入ってみたい!という方、そして仕事帰りや休日に
なんか面白いことないかなあ?という方、どんな方でも大歓迎。

家、仕事、学校など、毎日のあれこれからほんの少し離れて、
劇場に集まったみんなと、身体を動かしたり、
声を出したりするうちに、頭も心もすっきりほぐれて、
演劇がいつもよりもちょっと身近に感じられる…かもしれません。
気軽に遊びに来てみて下さい。



～はじめましてのお正月編～

日程：2019年1月5日（土）19:30～21:30

対象：どなたでも

*「デイ・イン・ザ・シアター」に参加されたことのない方

～平成最後のお正月編～

日程：2019年1月6日（日）14:00～18:00

対象：どなたでも

進行役：富永圭一（abofa） 参加費：各回500円 会場：世田谷パブリックシアター稽古場

学芸スタッフから

★ふと視線を感じ振り返ると部屋の中央に大きなガマガエルが鎮座しておりました。ぎゃー!と叫ぶ私の声にもなんのその。しばらく見つめ合ったあと、ベランダの窓から去っていきました。そのさっそうとした後ろ姿のかわいいいこと! たまらなく魅力的なカエルに出会った秋の夜長でした。[しおちゃん]

★丘のある街に越してから、一年半が経ちました。初めは意気込まないと登れなかった坂も、今では無心で登っています。時が経つと忘れてしまう感覚がある一方で、日々、新奇さを感じる瞬間もあります。丘の上から街並みを見ると、落ち葉を集めるお母さんを見るとき、毎日新しくいいなあと思っています。[よっこい]

たまにはこんな役 #14



つづく

編集後記

世田谷パブリックシアターが開館して以来、20年にわたって続いている《デイ・イン・ザ・シアター》は、1日1回限りのワークショップで、どなたでも気軽にご参加できます。そんな気軽さをお伝えしたく、毎号、特集に合わせてコスプレ?をしている表紙のキャラちゃんの装いは、足元のスニーカーだけという……とってもラフな姿にしてみました。

ところで、《デイ》の「気軽に劇場に行く感じ」というのは、実はけっこう斬新で、試行と挑戦の果てに確立されたスタイルなのだとな、元劇場部（初代）学芸スタッフの川島英樹さんのインタビューを伺って思いました。

というのも、この街に生まれる劇場が、「そこで暮らす一人ひとりのための劇場」となるためにはどのようなワークショップをやるのがいいのか——世田谷パブリックシアターが完成する何年も前から模索し、実践する中で生まれたプログラムこそ、《デイ》だったからです。

《デイ》の変わらない気軽さは、劇場がすべての人に開かれ続けるためにあるのでしょう。そこでは、知らない人同士が束の間、出会い、季節や時節に寄り添いながら、演劇をつくっています。

ぜひ、街に出るように、ふらっと《デイ》に足を運んでみて下さい。あなたの場所も、必ずあることをお約束します。[かおるこ]

「キャラマガ」 Vol.14 / Dec.2018

発行日

2018年12月25日

発行

公益財団法人せたがや文化財団
世田谷パブリックシアター
〒154-0004
東京都世田谷区太子堂4-1-1
Tel. 03-5432-1526
https://setagaya-pt.jp

編集

大谷薫子(本のモ・クシュラ)

企画

恵志美奈子、九谷倫恵子、
塩原由香理、田幡裕亮、横井貴子
(以上世田谷パブリックシアター学芸)

デザイン

株式会社ウチカワデザイン

印刷・製本

株式会社リヒトプランニング

協賛

TORAY 東レ株式会社

後援

世田谷区

世田谷パブリックシアターとは

世田谷区がつくり、(公財)せたがや文化財団が運営している、演劇やダンスのための専門劇場です。三軒茶屋のキャロットタワーの中に、世田谷パブリックシアター(約600席)、シアタートラム(約200席)の2つの劇場と稽古場、作業場などを擁し、ワークショップやレクチャーなどの参加体験型事業にも力を入れています。



世田谷パブリックシアター(主劇場)



シアタートラム(小劇場)

世田谷パブリックシアターへのアクセス



お問い合わせ 世田谷パブリックシアター

〒154-0004 東京都世田谷区太子堂4-1-1 キャロットタワー 5階
Tel.03-5432-1526 (代表) Fax.03-5432-1559
<http://setagaya-pt.jp>

世田谷パブリックシアターは、東京都世田谷区太子堂の三軒茶屋駅にある26階建ての高層ビル、キャロットタワーのなかにあります。東急田園都市線、東急世田谷線三軒茶屋駅と直結しています。